

生・死・認知症に関する考察

—認知症を患う母との関わりを通して—

坂田昌彦*

1 はじめに

平成29年の夏前から同居している母(90歳代前半)に幻聴・幻視などの認知症の症状が現れ始めた。当時は症状も軽く、私(50歳代後半)は母を、千葉県内、東京都内の神社・仏閣、美術館、博物館などに頻繁に連れ出し、活気ある日常を作り出すことで症状の進行を遅らせるように傾注した。

しかし、平成30年4月より急激に症状が悪化し、深夜の徘徊などが始まった。さらに同年6月には拒食・拒水、暴言・暴力が激しくなり、最後は箸を振り回し幻覚と戦うなどして、家族介護が限界となり、病院の認知症病棟に入院した。

なんと空しいことだ。かつては才女として旧制奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大学)において、国費で数学を学んだ。卒業後は、多くの中・高校生に数学を教えた。国も生徒たちも母を必要としていた。結婚後は、高度成長期の働き蜂であった父を内助の功で支えた。その傍ら、高校の非常勤講師や学習塾の先生を務め、家計も支えた。父が脳溢血で倒れると、献身的な介護に勤しんだ。まだら惚けとなった父は感情を制御することが難しくなり、母を幾度となく大声で罵った。しかし、母はその感情的な暴言にも耐えた。また、愛情深く子育てにも力を注ぎ、二人の子供を育て上げた。立派な人生だ。

だが、今、母は認知症病棟にいる。母は個室からあまり室外に出ない。作業療法(カラオケや塗り絵など)にも参加しようとしなない。たまに個室から出てきて、遠目でそれを見ているだけだ。友達を作ろうともしない。

他者から必要とされ信頼されてきた女性の最晩年が、こんなにも侘しいものになるのかと思う。母は、年齢的に余命は長くないだろう。

母の現状を見つめることにより、人間の「生」と「死」とは何か、そして人生最終盤における「認知症」のケアなどの在り方を模索したい。

* 主な職歴：奈良県吉野保健所精神衛生相談員(現・精神保健福祉相談員)、(財)厚生「労働、問題研究会情報企画部長(厚生「労働、省広報誌・執筆担当)、(財)長寿社会開発センター出版管理課長、佛教大学非常勤講師、千葉県中央児童相談所生活指導員嘱託。
電子メール：s.masahiko119[a]gmail.com

2 グラデーション（漸次的移行）

母が学び教えてきた数学の世界には〔定義〕がある。

一例を出せば「2辺の長さが等しい三角形を二等辺三角形という」とする〔定義〕がある。

〔定義〕は神が決めたものではない。他でもない人間が決めたものだ。

しかし〔定義〕は証明できない。そのように〔定義〕すると都合が良く、調和がとれるということしか言いようがない。

「死」は一般的に、三兆候（瞳孔反応停止、呼吸停止、心停止）をもって〔定義〕される（脳死の「死」は、別の〔定義〕が適用されるが、その問題を考察する場ではないので横に置く）。

自然界にはそのような〔定義〕はない。極論ではなく、〔定義〕する者がいない世界には「生」も「死」もない。

私達が生きている社会では、「生」とはトランプのカードが表側を向いており、「死」とは突然、そのカードが裏返るように〔定義〕されている。だが、母の老・認知症とともに時間を過ごして来て感じることは、「生」と「死」は表側を向いているカードが、一瞬にして裏返るような関係とは違うということだ。「生」と「死」という二元論的な認識では、見落としてしまう領域がある。

「生」は徐々に「死」に染められ、その流れのなかで「死」に到達する。例えるなら、星空のなかを、東から少しずつ太陽が昇り辺りを照らし、次第に青空へと変えて行く。そして、太陽はメラメラと輝き、見渡す限りの突き抜けるような青空を描く。しかし、やがて眩い輝きを放つ太陽は徐々に西に傾き、いつしか夕暮れの空を、日没後には夕闇の空を描き、星空に戻る。つまり人間の「生」と「死」はグラデーション（漸次的移行）の世界のなかにある。

母が人類誕生時の状況で生存できているか？それは無理だろう。母どころか、還暦が間近になった私もとっくに死を迎えているだろう。母だけでなく私もまた現代科学の恩恵を授かり生きてきた。医学だけでなく様々な科学分野の保護のもと、生きてきた。

野生の生命は現代科学の恩恵なしに生きていて、「生」から「死」に移行する最終段階のグラデーションの生命の時間は短いだろう。しかし、現代科学の発展は、人生最後期にあるグラデーションの時間を延ばしてきた。ならば、このグラデーションにある生命の時間を承認しなければならない。このグラデーションにある生命の時間を尊重しなければならない。そこにある時間の価値は、現代に生きる人間が新たに〔定義〕づけなければならない。

母は今、人生最後期にあり、星空の世界に戻ろうとしている途中なのだ。若

者のような赤々とした太陽は沈み、その残光に照らされている世界にいるようなものだ。

一言で言えば、「生」と「死」が、ない交ぜになっている状態。

私はそれを、取り敢えず便宜上〈夕闇の時期〉と〔定義〕する。そして、青壮年期を〈青空の時期〉と、死を〈星空の時期〉と、同様に〔定義〕する。

太陽が頭上に輝いている〈青空の時期〉では西を向いても東を向いても空は同じように青色をしている。しかし、〈夕闇の時期〉は違う。西の空はオレンジ色に燃えている。オレンジ色のグラデーションの領域が徐々に小さくなってきたとき、東を向けば青色の空は既に紺色に染められ、星々も輝き始めている。

何十年も開いていなかった写真アルバムを広げ母の 20 代の頃の写真を見る。白黒写真のなかで、生徒達に囲まれて嬉しそうに弾んでいる。母にとって眩しい〈青空の時期〉だ。母は今、少しずつ〈星空の時期〉に向かおうとしている。

「死」が「生」に混じり合ってくる。母はある意味、もう半分以上、死の世界にいるのかもしれない。かつての教師としての知性も母としての頼もしさも霞んで行っている。〈夕闇の時期〉は足元が暗い。道を照らすランプが必要だ。私はそのランプに火を灯す役割の一助を担うしかない。〈星空の時期〉へは、母が母のペースで歩いて行く。

見舞いの日によって、母の様子は違う。ほとんど幻覚について口にせず、穏やかで、静けさのなかに佇んでいる日もある。しかし、幻覚に支配され、興奮して「殺される」などと苦しそうに話す日もある。一日で、そして数時間で、または私が発した一言をきっかけにすっかり様子が変わってくる。静穏と恐怖が脈略なく訪れる。それが母における〈夕闇の時期〉の特徴だ。その変化に途惑ってしまう。母の意識は西の空にも東の空にも縦横無尽に駆け巡る。

3 理想の人間像

母は優秀な教員であった。それは間違いない。私はこれまで何人もの母の元生徒に会ってきた。ある教え子は「先生がいたから、国立大学医学部に入り医師になることができた」と、ある教え子は「まったく勉強をせず、悪戯ばかりしていたのに、先生は最後まで私を見捨てることはなかった」と昔を懐かしんでくれる。母は多様な学力・性格の生徒たちを指導できる器の大きな教員だったのだろうと、息子ながら一目置いていた。だからこそ、認知症になった母と過去の母のイメージの狭間で私は苦しんだ。

歴史に残るような偉人ならば、築き上げた業績は克明に記されるだろう。しかし、最後、認知症を患えば、その部分の記録は削除されるか数行で片付けら

れるのではないだろうか。

私たちは生まれてしばらく経った頃から、自立して生きていけることを目標に躡けられる。そして、「理想とする人間像」（以下、「人間像」と記す。）に近づけるように教育を受ける。大人になった際には、社会に貢献できるように知性・理性などを磨いて行く。その「人間像」のなかに、感情を制御できなくなったり意味不明のことを訴える認知症は入っていない。私たちは理想とする「人間像」に価値を置く。その「人間像」は、グラデーションのなかの一つである＜青空の時期＞の「人間像」だ。しかし、この時期にある人間の強靭さしか認めないのならば、＜夕闇の時期＞が持つ脆弱性を認めないのならば、人間にとって不可避の生命の流れを否定してしまうことになる。＜青空の時期＞もあれば、いずれ＜夕闇の時期＞も迎える。そういった流れを承認して、人間は、人間のいのちの意味を理解することができる。

母の現在の姿を見ていると、切なさが込み上げてくる。そのような思いを抱いてしまう私の心のなかには、上記の「人間像」に価値を置く感情がしつこくこびり付いているのだろう。

認知症が悪化するまで、母は老人としての「人間像」を見せつけてくれていた。肉体的な衰えはもちろんある。しかし、日々を過ごす姿勢は前向きで、食事づくりや洗濯などの家事を妻と分担しながら続けていた。「高齢者用手押し車」を押して近所の友人宅を訪れたり、ちょっとした買い物にも一人で出掛けた。「隣の家から読経の声が聞こえる」「ベッドの下で風が吹いている」などの幻聴・幻覚はあったものの日常生活に支障を来たすことはなかった。母自身は、今後、身体が衰弱して行くことを想定し、最期は訪問診療の助けを借りることを望んでいた。認知症が深刻さを増すことは想定外だった。

しかし、平成30年4月のある日、私と一緒にお寺参りに行った帰りの電車のなかで急に目が泳ぎだした。意識が定まっていないうのが見て分かった。その深夜から母の徘徊が始まり、近所の家の玄関の前で、幻聴と話をしたりする様になった。

私は正直、驚いた。その数日前には「数独の新しい解き方を発見した」と母は若者のようにはしゃいでいた。母は「知」が衰えることのない別格の老人なのだ、驚嘆していた矢先のことだったからだ。

母は最晩年まで「人間像」を保ち続けた。しかし、短期間のうちに幻聴・幻覚に足を取られ感情を制御できなくなり、家族だけではなく知人に対しても一方的に暴言を吐く様になった。母が長年手放すことのなかった「人間像」は瞬く間に音を立てて崩れて行った。

母にはかつて明確な役割があった。生徒を教育すること、子供を産み育てる

こと、家族を支えること、様々な役割を果たしていた。また、晩年を迎えた母は、数独や琴の演奏、編み物を趣味とし、穏やかな日々を過ごし、社会や周囲が描き求める理想的な老人の役割を担っていた。しかし、今の母はそのどれでもない。すべて、終了している。認知症の症状が悪化することで、知り合いにも迷惑をかけた。私も妻も母のケアで奔走し、身も心も疲れることがあった。

母の認知症が悪化しないうちに他界したのなら大往生と言われたらだろう。母の人生は認知症が悪化する前に閉じていた方が良かったのだろうか。母は自身の晩節を汚したのだろうか。

現実の社会は、「人間像」を担える人達が核になり機能している。

見当識などに問題を抱えれば仕事（家事を含む）に携えることは難しい。そんな母は全ての役割を卒業したのだろうか。

母は、育児において、私に食事・排泄などの身体自立から箸の上げ下げや他者とのコミュニケーションを図る上でのマナー・ルールまで多岐にわたり身に付けさせてくれた。各ライフステージで必要とされる「人間像」に近づける様、育ててくれた。私は、大人になってからも母から学び続けた。すでに他界した父が病に伏せた時は、献身的な介護のありようを後ろ姿で教えてくれた。癌や骨折で窮地に陥っても、楽天的に前向きに生きる姿勢を笑顔とともに示してくれた。それらの役割を終えた母は現在、どのような役割を担っているのだろうか。

私にとって、母の最後の役割の一つは、人間には「人間像」から離れていく<夕闇の時期>があることを、伝えてくれていることだと感じる。人間は「人間像」を求め我がものして行く<青空の時期>だけではなく、その籬（たが）が外れ、幻覚に翻弄され「知」を失ない、感情を制御できなくなり、時には暴言を吐いたり暴力を振るう存在でもあることを理解させてくれた。それが人間なのだ。その現実を了承することで、はじめて“人間の全体像、を等身大に捉えることができる。

4 接近と遮断

入院から半年以上が過ぎ、母の具合は心身ともに安定して行った。口数は少なく、幻聴・幻視はある。ただ、その幻聴・幻視は母が恐れおののくようなものではない。「神様が、空に鳥の形で雲を描いてくれている」というような微笑ましいものだ。母の帰宅願望を伴った訴えには心を引き裂かれる思いがしたが、十分ではないにしろ、母の<夕闇の時期>を受け入れ、ともに歩いて行くことができていると実感できる日々が続いた。が、ある日、その甘い思いは吹き飛

んでしまった。母は私に「某国が日本に攻撃をしかけてくる」と恐怖を語り出した。さらに「病院に入院したい、手続きをとってくれ」と私に嘆願した。私は「手続きは済んでいるから安心してほしい」と母を諭した。しかし、その病院が今いる場所であると知ると悲痛な顔をし、怒り出した。「ここは病院ではなくリハビリテーションセンターだ」と老人が使いなれないような横文字が飛び出してきた。そして畳み掛けるように「私の病室は遺体置き場だ。女の子が遺体を運んでくるんだよ」と泣きそうな顔で声を絞り出した。病院を後にした私は、母の心のなかを理解しようと試み続けた。戦争が始まる恐怖、死体置き場にいる恐怖、それはどれほど辛いものかを必死に洞察した。だが、帰宅後、私はパソコンを開くと、無意識のうちに、お笑い番組の動画を探していた。普段、あまり関心のない漫談などの動画を視ては、笑い続けた。それしか出来なかった。それが、私自身の身を守る術であった。

母がいる<夕闇の時期>は多様な面を持っている。そこに暗雲が立ち籠めて、大雨が降っていることもあるからだ。

「受容」「共感」は認知症患者に寄り添う上で重要だが、両刃の剣の面を持っている。母の<夕闇の時期>に思いを巡らすことで、母が感じている辛さがある程度理解することは可能かもしれない。しかし、同時にそれは、片足を上げ、不安定に辛うじて立っているような状態だ。私は、精神が揺れ動く母より「健康」と〔定義〕される人達とほぼ同じ主観を持つ世界に足場がある。だからこそ、認知症になった母の心身を支える役割の一端を担える。

母の<夕闇の時期>を理解しようと努めることは大切だが、そこから抜け出す術も持っていないと、支援は出来なくなる。私は無意識のうちにお笑い番組を視ることで、母の<夕闇の時期>から抜け出そうとしていた。母の主観への接近と遮断を適度に調整しなければならない。

長年、認知症ケアにあたっている患者家族と話していてもそれを感じる。彼（彼女）達は、接近と遮断のあり方を経験上、トライ&エラーのなかで学び実践して来ている。家族という支援者は、寄り添うことはあっても倒れてはいけない。倒れないことが、支援において第一義的でなければならない。

5 文字から離れる

私たち人間は、文字・記号を産み出し論理を編み出し、それらを発展させて、文明を構築した。

人間は大人になるに従い、語彙を増やすとともに論理的思考を精緻にして行く。しかし、認知症は、その獲得してきた語彙も論理的思考も手放して行く。「感情」という本来、人間が持っているもっとも原初的な生存の根底の機能を露わ

にする。「知性」の檻は壊れ、様々な感情が解き放たれる。

それゆえケアする側は、論理に支えられたアプローチだけではなく、論理に囚われない柔軟な解釈・対応を身につけなければならない。前者は、家族などが「知性」を持って認知症という疾病を学び支援していかなければならないということで、それは原理的には道筋が見える。なぜなら、私たちは「知性」を持って論理的に思考することに慣れているからだ。難しいのは後者だ。私たちは後者の仕方をすっかり忘れている。

私たちの多くは中学・高校と6年間、英語を学ぶ。その結果、英語の読み書きはある程度出来るようになって、聴けて、話すことができる人は多数を占めない。その6年間という年月で、乳児は6歳になり日常会話は十分出来るようになる。子供が文字を習い文章の読み書きができるようになるのは、基本的には小学校に入学してからだ。つまり、子供は文字を知らずに、話せるようになる。中学生から始まる英語学習は、アルファベットを文字で習い、文法を習い、その知識に従って、聴く・話す、を進める。英語の学習法そのものが文字まみれなのだ。これは英語学習に限ったことではない。大人になるということは、文字まみれになるということだ。文字の洗脳を解くことは容易ではない。せめて出来ることは、文字を意識的に遠ざけ、子供が聴く・話す、を習得する過程にある無垢な感性を研ぎすますことだ。そうすることが、「知性」を失い「感情」が主体となった認知症患者とのコミュニケーションを図る術だ。

あるアメリカの YouTube 動画で、日本語字幕のテロップが付いているものを視聴した。その動画のなかで、アメリカ人女性が、**"my hair wasn't really like my choice、**(私の髪型は、私が選んだものではありません)と話す。しかし、日本語字幕には「髪は、自分で選んだんです」と記されている。翻訳者には **"my hair was really like my choice、**に聞こえたのだろう。英語の動画に日本語字幕を付けることができる人は、極めて上位の英語の使い手だ。そのような上級者でも **"wasn't、**が **"was、**に聞こえてしまう。このシーンで使われている英単語は、どれも初歩的なもの。英語を母国語としていれば、子供でも聞き間違ふことのない日常会話レベルのものだ。だが、文字から英語を学んだ日本人は、上級者でも **"n't、**を聞き落としてしまう。私をはじめ凡庸な日本人ならばなおさらだ。発話においてそれぞれの単語は、もはや「単」ではなく、「連なり」となる。文字を見れば、日本の中学生でも **"n't、**は目に入り正しく翻訳できるが、発話という「連なり」のなかに溶け込んだ **"n't、**を聴きとることは難しい。

現在の母は、文字に置き換えて分かるように論理的に話してくれないことが多々ある。上記の英語で喩えると **"n't、**を分りやすく発音してくれない。その「感情」が込められた非論理的な「連なり」を正しく把握するためには、文字に落とし込み理解しようとするを一旦封印することだ。私自身が、文字を

知らなかった頃に意識的に戻り、感性を主体とした当時の感覚を育て直す必要があるように思う。

6 寄り添う (Being)

1200人以上の死を見届けた米国認定音楽療法士の佐藤由美子は、自著『死に逝く人は何を思うのか』（ポプラ社、2017年）のなかで、次のように述べている

《無力でもいい。それこそが、寄り添う (Being) ということなのだから。何かをする (Doing) よりも、はるかにそれが大事だ。思いやりを持って患者さんの気持ちを聞き、受け止める。いちばん大切なのは、あなたの存在そのものなのだ。》¹

「寄り添う」という行為は、私が三十数年前、保健所で精神衛生相談員（現・精神保健福祉相談員）として勤務していた頃も、既にその重要性が語られていた。しかし、漠然としていて、感覚的に理解するしかなかった。

長い時を経て、母の老い・認知症と向き合い、ようやく腑に落ちるシンプルで飾り気のない説明と出会ったように思う。

「寄り添う」の表現に【Being】

「何かをする」の表現に【Doing】

という簡素な英語が充てられていることが、私の理解を促した。

私たちは、日常において「動き、結果を出す」パターンに染まっている。パソコンの前に座って、仕事をしている人がいるとしよう。その人が、指を動かして文字や数字が打ち込まれていけば、真面目に働いていると判断され、ただ座って頬杖をついているだけならば、はたからは、怠けていると見なされる。それ故、とにかく少しでも動き、痕跡を残そうとする。しかし、老い・認知症のケアなどでは、それは必ずしも正解ではない。

母は【Doing】を求めている。【Being】を望んでいるのだ。

頻繁に面会に行っていると、母は精神的に落ち着く。面会に訪れることを喜んでくれる。母は、たまにダイルームに出てくるものの、大半は個室で寝て過ごしていて、口数も少ない。母の面会に行っても、一緒におやつを食べ、車椅子を押し散歩するだけだ。【Doing】ではなく【Being】だ。だが、母には、今【Being】こそが必要なのだ。大切なのだ。

¹ P.129.

母は、おやつを食べ終わってから、新聞に目を通すことが度々ある。読んでいのように見えて、実は眺めているだけだ。世の中の動きに、少しでいいから関心を持ってほしいとの思いが首をもたげてくるが、それを求めてはならない。

母の【Being】に合わせ、私もまた【Being】していれば良い。母が【Doing】を求めた時、無理のない範囲で【Doing】すれば良い。

ある日のこと。妻が見舞いに行った。見舞いの内容は、私と変わらない。おやつを食べ、新聞を眺め、車椅子での散歩。相変わらず、母の口数は少ない。妻も母に合わせることに慣れてきて、無理に会話をしようとしなかった。

【Doing】ではなく【Being】に徹した。妻の帰り際、母は満面の笑みを浮かべ「有り難う、楽しかった」と、噛みしめるように言ったという。

また、クリスマスが近づいてきた日のこと。談話コーナーの窓辺にイルミネーションが飾られていた。病院内のイルミネーションだから街角に飾られているような派手なものではない。窓の外には、夜の帳が降りてきて、イルミネーションの光が鮮やかになる。母はしばらくその光をぼんやりと見つめていた。そして、うっとりした表情を浮かべ「綺麗だね」と一言ポソリと呟いた。かつての母なら「なぜ」綺麗と感じるのかを論理を組み立て、雄弁に説明していた。今の母にはその能力はない。しかし、論理的思考が出来なくなった分、素直にまじりけ無くその美しさを実感できているのかもしれない。

7 家族もまた人間

いつものように談話コーナーで母と寛いでいたある日。新聞を捲っていた母は、私立高校の入試問題が掲載されているのを見つけた。そのなかの数学の問題を解きたいと言い出したので、私は嬉しくなり、事務室の職員に頼み数学の問題の拡大コピーを取ってもらった。母は「病室に戻ってから一人で解く」とコピーを持ち帰ったが、結局、問題に手を付けることはなかった。似たようなことが何度かあった。談話コーナーには小さなスペースだが図書類も置いてあり、何故か、中学入試の問題集もあった。母はその問題集のページを興味深く捲った。私は貸し出しが出来ることを伝えたが、母は「それは心の負担になる。代わりに小学生向けの算数の問題集を買ってきて欲しい」と言った。見舞いの帰り、私は書店に足を運び、リクエストされた問題集を時間をかけ吟味した。母の現在の数学の能力に応じたニーズに応えられるよう、一冊に小学校1年生から6年生までの問題が載っているものを購入した。そして、次の見舞いの日にその問題集を持参し、意気揚々と一緒に解こうと促した。すると、母は「強制されているようで嫌だ」と怒りだし、問題集を押し返した。私は、母が入院後、初めて感情的な言葉を投げつけた。

「買ってこいと言われたから買ってきたのに、それはないでしょう」と。

帰宅後、私は考えた。母には元数学教師としてのプライドがあったのだろう。算数すら解けなくなり、息子にその解き方を指導してもらうのは屈辱だったのではないか。だから、母のことを思い遣れば、感情的になってはならないと反省した。

同時に真逆のことも思った。私も生身の人間だ、時には感情的になることも許してくれと願った。医師や看護師など専門職には、高い倫理性が求められるであろう。しかし、家族にまで、完璧な感情コントロールが求められるとするならば、それは過酷すぎる。在宅介護をしていた際、母の認知症が悪化し、私や妻の人格すら否定するような言動が続いたとき、私は何度か声を荒げた。それは私自身をまた妻を守るためであった。もし、そこで自身の感情を押さえ込んでいたら介護うつになっていたと振り返り思う。母が入院した後の見舞いに置き換えると、どんな時も自身の感情を抑え込まなければならないというハードルが設けられるならば、足が遠のく。

親子喧嘩をしたことのない親子など皆無だろう。時には喧嘩をしながらも、ここまでともに歩んできた。だから、これからも凸凹はあるにせよ、ともに歩んで行きたいと思う。凸凹を否定せずに、凸凹を抱えながらともに歩んで行きたいと思う。それが、切れれば血の出る人間同士が、ともに歩く術だ。

翻って、看護に携わるプロにも、私は完璧な感情コントロールを要求しない。母が入院し、容態が安定しない頃、母は女性看護師の腕を引っ搔いた。女性看護師はミミズ腫れになった腕を見せて、その時の状況を説明してくれたが、彼女は終始笑顔だった。「申し訳ございません」と頭を下げると、「いえ、いえ、仕事ですから」と微笑んでくれた。よく我慢してくださった、申し訳ないと心底思った。看護に携わるプロもまた機械ではなく、感情がある。だから、完璧を求めようとは思わない。24時間、母を看てくれることに感謝するばかりだ。

8 忘却

入院生活が続くなかで、母の誕生日がおおよそ一ヶ月後に迫ったとき、私は「(母の) 誕生日を覚えている？」と訊いた。母は〇月〇日と正確に答えた。次に「僕の誕生日を覚えている？」と訊いた。母は「覚えていない」と首を傾げるように答えた。私は、母の答えに不思議な感覚を覚えた。私の誕生日(月・日)は母と同じだ。母は私が生まれたとき、そのことに深い縁を感じ、喜んだという。そのため、様々な記憶が失われていくなかで、私が誰かが分からなくなるとは、かなり最後まで残るだろうと思っていた記憶だ。母は10年ほど前に一緒に出かけた温泉旅行のことも覚えていたが、私の誕生日は記憶から抜け

落ちた。母にとって、私の存在は少しずつ様変わりをしているのだろう。その変化を理解しなければ、現在の母の心のなかを捉えることは難しい。私は母の言葉を聞き、一抹の寂しさを感じたがどこかで安心感も覚えた。それは息子に関する記憶を段々と手放していくということは、息子への執着から徐々に遠ざかっていくということだからだ。

仏教では執着を嫌う。しかし、その教えを会得することはとても難しい。なぜなら「愛情」と「執着」は表裏一体にある。

母が認知症の初期段階の時期、私はまだ仕事を持っていた。帰宅が夜遅くなることもある。しかし、母は夕暮れになると、神経質すぎるくらい私の身を案じ、幾度も妻と私に不安な心の裡を吐露した。妻も私も「決して心配することは無い、ここは治安の良い日本だし、帰宅は終電より早い電車に乗れる。帰路には、沢山の人が溢れている」と話し説得した。しかし、母は、それでも心配だと聞く耳を持たなかった。

母の息子に対する愛情が合理性を失い、家族の社会生活の足を引っ張ることになるのだ。しかし、入院後、時が流れて行くなかで、母は息子の誕生日を忘れていた。息子への執着が薄らいで行くことを感じた。母は知らず知らずのうちに、次の世界への準備を着々と進めているのではないかと思った。

仏教者は、執着から離れるため様々な取り組みを行う。生涯独身を貫く、家庭から去るなどして、修行に没頭する。それらの実行・過程のなかで、執着を離れて行く。しかし、母はそれらの行動を試みることなく、認知症の進行のなかで、執着から離れて行っている。言葉を変えれば、認知症の進行は、仏教が提示している道を自然に拓いてくれている。凡人には到達できない道なき道の案内人になっている。

母が入院後、母の部屋を整理した。部屋に吊るしてあるレジ袋のなかに、途中まで編んだ編み物と食べかけの饅頭がいっしょに入っていたりした。意識が混沌としていたことが推察できる。そして、一枚のノートの切れ端を見つけた。その切れ端には「償わなければならない、償わなければならない、繰り返し、繰り返し」という走り書きがしてあった。乱れた文字だった。まるで子供が書いたような文字だったので、認知症が進行してから書かれたものだと推測できる。私は母の幻聴のなかに「償わなければならない」という言葉が、繰り返し聞こえて来ていたのではないかと思っている。

母は、悪夢にうなされることもあった。私は息子であっても、母の全てを知っているわけではない。母の心に付着しているあれこれを、当然のことながら全て知っているわけではない。母は人生のなかで、私が知らない苦しみを抱え

ていたのだろう。

認知症の進行のなかで、様々な拘り苦しみも忘れていけば良いと願う。

あるベテランの認知症医療従事者は、私に次のように語った。

「いずれ息子や娘の顔も忘れる。夫や妻の顔も分からなくなる。次第に自分自身が誰なのかも不確かになる。そして最後には自分が生きているか死んでいるかの意識もぼやけて来る。その果てに死を迎える。それって、素晴らしいことだと思いませんか？ 死の恐怖からも解放されるんですよ」

認知症は、究極の仏教の悟りの境地へ、人間を誘っているのかもしれない。

9 “無常”の気づき

母が入院したのは蒸し蒸しする梅雨時だった。その時点で、私の心身はかなり疲弊していた。母が深夜に鍵を開けて、近所を徘徊するなどの症状があったからだ。交通事故などの危険があるので、24時間常に神経を尖らせておかなければならない。

徘徊の期間は入院までの約2か月間。深夜の徘徊に肝を冷やす介護家族の苦労の期間としては短い方だ。母の寝室の隣の部屋に私は布団を持ち込み、寝起きする。しかし、いつ母の徘徊が始まるか分からない。少しでも母親の部屋から物音が聞こえてくると、反射的に目覚めることができるように私の身体は過敏に調整されて行った。徘徊が始まると一緒に外に出て歩いた。徘徊の理由は「友達が会いにきている」「教え子が空の上で監禁されているので助けに行く」という穏やかなものが主だったが、次第に暴言・暴力の症状も現れ始めた。それらのケアに振り回され、私の心身は睡眠不足で疲労が蓄積されて行った。24時間、昼夜を問わず母の見守りが必要だったので、私が外出する機会は僅かしかなかった。閉ざされた空間にいることが多く、私自身が監禁されているようなストレスを感じていた。

母が入院してから、私は貪るように眠った。朝から夜まで眠り続けた。

また、解放された広い空が見える場所に身を置きたいと強く思い、広い敷地の公園を幾つも散歩した。その一つに佐倉城址公園（千葉県佐倉市）があった。私は、この公園に特に魅力を感じていたわけではない。端的に理由を言えば、「城」が聳え立っていないからだ。視覚的に歴史が身近に感じられる「城」があれば心が躍るが、無いのだから、わざわざ電車に乗ってまで散歩に来るところとは思っていなかった。それでも猛暑のなか、帽子をかぶりペットボトルで

水分補給をしながら、ひたすら歩き回った。歩き疲れると何度も休憩をとった。

休憩のひとつコマ。

“下総国佐倉城天守跡、と記された石碑から少し離れた場所に設置されたベンチに腰掛け、現在は広々とした芝生広場になっている本丸跡を、暫くぼうっと眺めた。その時、自分の愚かさに突然気づかされた。ここにあった「城」は、もうないのだということ、どんなに栄華を誇っても、それは永遠ではないのだという当たり前すぎることを、目から鱗が落ちるように実感した。清々しさを感じた。もし、この公園内にいまだに佐倉城が威風堂々と存在していたら、そのような気づきには至らなかったであろう。“無常、であることを知らしめてくれる「城址」という装置の有り難さを痛感した。母の現実を完全にではないが受け入れられる転機となった。私が自宅から自転車で移動できる範囲内に、母が入院している病院の系列病院があり、シンボルマークは同じだ。自転車で乗り走行していると、そのシンボルマークが目に入る。その度に胸が痛み、目を逸らした。しかし、佐倉城趾公園での気づき以来、私はそのシンボルマークが気にならなくなった。

“無常、は知識で理解することではなく、なにかの瞬間に体得するものなのだ。

10 同じ苦しみを持つ群れ

無理のない範囲で、出来るだけ見舞いに行くようにしている。同様に頻繁に見舞いにくる家族とも私は話すようになった。また、在宅で認知症介護に当たっている家族とも深く話す様になった。私がいかに人に言えないような母の認知症の症状（暴言・暴力など）、その対応に苦慮したことを話し出すと、彼（彼女）らは同様のまたはそれ以上の悲痛な話を、包み隠さず話してくれる。

暴言・暴力などは、かつてもそうであっただろうが、特に現代社会を覆う倫理では完膚なきまでに否定される。社会規範から外れる。だから、認知症という疾病によるものだと分かっているにもかかわらず、通常、身内に起こった認知症の症状を裏も表も全て語ることはしないだろう。だが、同じ境遇の家族同士ならばガードを下げ語ってくれることを実感した。恥も外聞も無く語ってくれる。それは私を同じグループに所属している者として認識してくれるからだと思う。私は、そのグループを「同じ苦しみを持つ群れ」と便宜上、表現する。医師・看護師なども真摯に支援してくださっており、その尽力に深く尊敬の念を抱いている。

しかし「同じ苦しみを持つ群れ」だからこそ襟を開き話し、共感・共有するものがある。それは、かつて私が支援する側の職業に就いていて、今、支援される側の患者家族になって痛感することだ。

「同じ苦しみを持つ群れ」には年齢・性別・学歴・社会的地位もまったく関係ない。利害関係はなく、ただ共感・共有し、そこから各々が方策や希望を見いだそうとするのだ。

「同じ苦しみを持つ群れ」は苦しみだけを語り合うわけではない。喜びも語ってくれる。半世紀以上の時を経て、一緒に窓辺から見える景色に視線を投げ微笑んでくれたなど、一見、取るに足らないような話を、エベレストの山頂に立った喜びのように話してくれる。事実、それが比類の無い喜びであったりするのだ。

「同じ苦しみを持つ群れ」はとても良く勉強している。ネットや書籍などから認知症に関する科学に裏付けされた医学・看護・介護の知識を仕入れている。しかし、同時に病院に見舞いにくる、または在宅で介護する「私」とは何かを模索し続けている。「私」もまた苦しいのだ。精神面、肉体面、経済面、どれをとっても不安に苛まれる。

「同じ痛みを持つ群れ」にいる人達のなかには、個々に自分の置かれた現状を“修行”、“使命”などと位置づけ、意味を見いだす人もいる。

科学者はそれを科学的知見に基づいていないと、一笑に付すかもしれない。せいぜい自己防御、自己正当化のための心理作用と位置づけるのではなかろうか。しかし、それは一面的な見方であろう。

「私」にとっての「私」の存在の〔定義〕は、数学に置ける〔定義〕となんら遜色はない。「私」による〔定義〕が、「私」に淀みなく流れこむようになるのなら、それで良い。

数学における〔定義〕のように一般化は必要ない。家族内における一般化も必要ない。

それぞれの家族も一枚岩ではない。

最後には自分が〔定義〕するのだ。

1 1 母の魂

母は、ある日本神道の信者だ。母の親の代から継承して来たものなので、人生で大きな転機があつて入信したものではない。特に熱心な信者ではない。万教同根（全ての宗教の根は同じ）という思いがあり、仏教寺院でもキリスト教教会でも手を合わせた。数学という科学に魅了されていたが、そのために素朴な信仰心を失うことはなかった。

母は「魂（靈魂）」の存在を信じていた。それは私も似たようなものだ。私は、母が健康であろうが認知症になろうが、生きている間も他界した後も、母の「魂（靈魂）」は存在していると漠然と思っている。

現代人は、科学文明のなかで生きている。基本的に科学を信じている。しかし、信仰心の全てを捨て去っているわけではない。

人間は、科学を通して様々なことを明らかにしてきた。が、森羅万象の全てを知り尽くしているわけではない。

「魂（靈魂）」については「脳（または脳を含む身体）」のメカニズムに全て還元することができると思う人達は、多くいるだろう。

「2 グラデーション（漸次的移行）」において、私は、「生」と「死」はグラデーション（漸次的移行）の世界のなかにあるとし、人生最後期を、取り敢えず便宜上＜夕闇の時期＞、と〔定義〕した。それは、三兆候による死や脳死と同様に、人間（ここでは私）が〔定義〕したものだ。人間による観察や思考などをもとに〔定義〕したものであり、「私の外側にある何か」から啓示を受けたものではない。しかし、「魂（靈魂）」は、古代から多くの人間が信仰のなかで認知して来たものだ。信仰は、人間が「信じる」という一方向だけで説明しきれない何かがあると思う。信仰のなかには「私の外側にある何か」から受け取った情報が含まれていることを否定できないからだ。「魂（靈魂）」そして「あの世」「生まれ変わり」は、三兆候などによる死が〔定義〕される以前から、信仰のなかで連綿と受け継がれている。その信仰の核となる概念を、人間が築き上げてきた科学の目だけで語り切ろうとするのは傲慢なような気がする。

かつて、哲学者の山本信は『脳と心』（東京大学出版会、1983年）において、科学を盲信することについて、次のように警鐘を鳴らしている。

《今日一般に「科学的」という言葉はそれだけでただちに良い意味に使われているけれども、実は「科学」という言葉の語義は「分科の学」ということであり、したがって、「特定の部分にかかわる科目としてのみなりたつ学問」という意味の言葉なのである。》²

科学一辺倒で、物事の全体・総体に言及できると安易に考える事は、危険であるように思う。

突発的な事故・災害に起因する死、戦場における死などでは、意識が不鮮明になる時間が短い。

見当識がはっきりしているうちに、一瞬にして死が訪れる。これらの場合、「魂（靈魂）」が死後、その意識のまま身体を抜け出て、あの世に行くのはイメージしやすい。例えば、若者が交通事故に巻き込まれ、一瞬のうちに死亡したとし

² P. 281.

よう。その若者の「魂（靈魂）」は、大きく破損した肉体を後にし、「あの世」に立ち昇って行く。この時の「魂（靈魂）」のイメージは若者そのものだ。勉強に勤しむ学生ならばそのイメージ、ネクタイを締め仕事をこなすビジネスパーソンならばそのイメージだ。

しかし、母の場合、私はそのイメージがしづらい。教師として、生徒達に勉強を教えていた頃の凛々しい姿なのか、認知症になり、今、どこに入院しているのかすら分からなくなった現在の姿なのか。後者ならば、三途の川を渡る際「脱衣婆（だつえば）」とのコミュニケーションにも事欠いてしまうのではないかと首を傾げてしまう。

現在の母は、無口になったこともあるし、様々なことを失念している。信仰の話は、ほとんどしない。ただ、習慣的なことなのか、食事の後は手を合わせる。昼も夜もよく眠るが、夜間にベッドに腰掛け、目を閉じ手を合わせていることがたまにあると、病棟看護師はいう。表情は乏しく、社交性もなくなった。母はかつての母ではない。しかし、見舞いの帰り際、いつもハイタッチをして別れるのだが、その際、母は穏やかな笑みを浮かべる。その笑みのなかに、私は母の魂（靈魂）を垣間見るようでならない。知性でもなく形あるものでもなく、痩せ細った顔から滲みだす笑みのなかに「仏性」（一切の衆生が備えている、仏になれる本性）を感じるのだ。それが母の魂（靈魂）の実相ではないだろうか。

その魂（靈魂）が「あの世」に行き、いつか「生まれ変わる」、私はそのように茫漠と信じている。

なお、魂（靈魂）が実在するならば、人間の「死」の〔定義〕は、厳密には、魂（靈魂）が身体から抜け出た時ということになる。

1 2 愛される（慈しまれる）ために生まれた

若かった頃の母は、青々とした大樹のようだった。大地に根を張り、沢山の枝を伸ばし、生い茂った葉々の下には沢山の人が集まっていた。しかし、今は違う。まるで、浜辺に打ち上げられた流木のような。枝は折れ、瑞々しい葉はなく、（病院職員・患者などを除けば）周りには誰もいない。認知症が悪化して以降、未だ母は苦しみのなかにいると思う。概ね精神状態が安定してきたと思いきや、突然、激しい幻聴などの幻覚に襲われることもある。母自身が殺されるという幻聴もあれば、私が母を殺したと誤認逮捕され刑務所に入れられるなどの訴えを聞かされることもある。母からこういった思いの丈をぶつけられると、私は今もなお、慣れることができず、疲弊してしまう。だが、幻覚が著しくなったとき、母もまた苦しんでいることが良く分かる。それだけに、母の辛

さを思うと、私の心は二重に重くなる。

母の認知症を目の当たりにして、母は何のために生まれてきたのだろうと、しばしば考える。

「あなたは何ために生まれてきたの？」という問いに対して、野球に熱中している子供ならば「将来、プロ野球選手になるため」などと、また、大人になれば結婚式場で新郎は「妻を、そしていずれ生まれてくる子供を幸せにするため」などと答えるだろう。社会に目を向けるのならば、「将来、お医者さんになって一人でも多くの命を救うため」という子供や「IT 技術を駆使して、環境問題を解決するため」という事業家もいるだろう。

それらの、自身が生まれてきたことの意味づけに異論などない。素朴に素晴らしいことだと思うし、そういった目的意識を持つ人が増えて欲しいと願う。私にしてもスケールダウンするものの回答は、同類のものであった。しかし、母の、認知症をきっかけに、それらの自立的なスタンスだけでは網羅できない、生まれてきた意味があるのではないかと考えるようになった。

だが、その問いに対する私なりの答えは、何かを掴もうと前のめりになり紐解いている内は見つけることは出来なかった。何も求めることなく肩の力を抜き接した、いくつかのCCM (Contemporary Christian Music/現代的キリスト教音楽)、いくつかの大衆的なラブソングのなかに、私のこれまでにない眼差しが潜んでいることに気づいた。

私の苦しみのなかの問いは「“愛される”、ために生まれた」という回答で鎮まり和合した。

“愛される”が日本語として馴染まないならば、“慈しまれる”に置き換えても一向に差し支えない。

私は文法で言えば、＜能動態＞の視点しか持ち合わせていなかった。つまり“愛する”、“慈しむ”という視点しかなかった。しかし、母の現況を考えると、＜受動態＞の生まれてきた意味も噛み締めなければならない。そもそも、人間は生まれ落ちた時、一人では何もできない＜受動態＞なのだ。受動的に“愛される”、“慈しまれる”があって、その後に“愛する”、“慈しむ”ができるようになる。人生最後期を迎えた時のいのちの意味は、誕生の時と同じだ。そして、その概念は、全てのライフステージで欲されると思う。何故なら、人間は生涯“愛される”、“慈しまれる”があって、“愛する”、“慈しむ”が出来るようになるからだ。

母が「私は何ために生まれてきたの？」と問えば、「“愛される”、“慈しまれる”、ために生まれて来たんだ」と答えよう。

そして、私がせめてもできること、それは“愛する”、“慈しむ”ことだ。

犬を飼っている。補助犬（盲導犬・介助犬・聴導犬）候補としてパピーウォーカー宅で生後10ヶ月間育てられたが、気が弱いという理由で、補助犬になれなかったキャリア・チェンジ犬だ。1歳3か月で、我が家で飼うことになった。ラブラドール・レトリバーのオス、名前はダンボ（以下、Dと表記）、現在9歳半。室内で飼っているのだが、我が家に来た時、食べること・排泄など日常生活における躰は驚くほど行き届いており、当初、用意していたゲージはしばらくして撤去した。これまで、ゴミ箱を漁ったり、柱や電気コードをかじったりすることは皆無、吠えることに関しても、散歩の際、すれ違う犬から間近で吠えられた折に、「ワン」と一吠え、返したことが通算で2～3回あった程度だ。母・妻・私に怒る表情や行動をとったことは一度もない。人間より人間ができていると感心してしまう。ゲージを取り払って以来、Dの寝床は私の布団の上（布団のなかに入るのは良くないと、Dなりに判断しているらしい）なのだが、大型犬（33kg）なので、結果的に布団越しに私と密着して寝ることになる。

そんなDの年齢は既に老犬の域に達している（ラブラドール・レトリバーの平均寿命は約12年）。外見は1歳3か月当時とほとんど変わらないのだが、最近になって、これまでにない仕草をするようになった。

夜が更けてくると、Dは私に近づき、しきりに尻尾を振り出す。最初、何を意味する仕草か分からなかったのだが、Dは私と一緒に床に就くことを求めている。以前は夜遅くなると、Dだけで先に床に就いていたのに、今は電気を消して一緒に寝ましょうと要求する。そんな甘えた姿に、私はDの老いを見たように感じる。

犬は、言語を持たない。また、言語で紡いだ論理も保有していない。犬にとって、それらは生存において必要不可欠なものではない。同様のことが、同じ哺乳類である人間にも言える。人類は、その誕生時には、言語も言語を元に編み込んだ論理も持ち合わせてはいなかった。犬も人間も生存のために手放せないものは、感情だ。

「感情」は、喜怒哀楽など様々な要素で構成されるわけだが、歴史家のティファニー・ワット・スミス（Tiffany Watt Smith）は、TEDにおける講演『人間の感情の歴史(The history of human emotions)』³のなかで、「感情」の一つである「甘え」について興味深いメッセージを発している。

³ Nov. 2017. URL:
https://www.ted.com/talks/tiffany_watt_smith_the_history_of_human_emotions/transcript?language=ja

《私のお気に入りの感情の一つに日本語の「甘え」があります。「甘え」は日本ではとても一般的な言葉ですが翻訳するとなるとかなり難しいのです。「甘え」は皆さんが一時的に自分の人生の責任を誰か他の人に引き渡した時に得る喜びのことです。》

《 One of my favorite emotions is a Japanese word, "amae." Amae is a very common word in Japan, but it is actually quite hard to translate. It means something like the pleasure that you get when you're able to temporarily hand over responsibility for your life to someone else. 》

Dを最後は甘えさせてあげたい。これまで人間が理想とする「犬の像」をひたすら生きてきたのだから。「キャリア・チェンジ犬の責任を、誰か他の人に引き渡した時に得る喜び」で満たしてあげたい。それは母に対する思いに通じていく。これまで、理想の「人間像」を生きてきたのだから、最後に残る「感情」を、静かに穏やかに受け止めてあげたい。

母が母の人生の責任を、私をはじめとする他の人に引き渡し、あらゆるものから解放され、手ぶらで「あの世」に旅立って行けることを願う。

1 3 おわりに

母の入院後、見舞いの際、私の一番の苦しみは帰宅願望に応えられないことだ。「(幻聴が)連れて帰るように言っている」と認知症の症状を伴いせがむこともあれば、「私もそう長くない、だから最期は家で死にたい」と説得力を持つ正常な訴えであることもある。現実問題、今の病状で帰宅させると、母・私・妻で「共倒れ」になってしまう。しかし、母の願望は痛いように分かる。私が母の立場なら、同じように訴えるだろうからだ。

結局、母は、妄想に包まれながら「そうか……。もう、(あなたは)幽霊になったから、私を連れて帰ることが出来ないんだね」と、悲しそうに言葉を零したりする。

私は、自身の無力を痛感する。

母をなだめながら、前述の「寄り添う」【Being】を、見舞いの度に繰り返す。凡庸なことだ。画期的なことなどなにもない。しかし、その平凡な取り組みのなかに、「愛する」「慈しむ」が包摂されていると信じる。そして、その継続により、母の存在が、次第に私が生きる意味の一つになって行く。それは母もまた同じだろう。日が暮れてくると、母は「そろそろ暗くなってきたからお帰り」と息子への思いやりを示してくれる。「また、二日後に来るね」と私は母に大きく手を振る。

互いが、生きる意味の断片となる。それが、見舞いという平凡な日々のなかに見つけた非凡な小さな光だ。

【付記】 筆者は、母に対し、この「考察」の学術誌掲載による社会的利益と個人的不利益を説明し、匿名とすることを条件に、以下の執筆について同意を得ている（また、刊行までの間に考えが変わった場合は、同意を撤回できることも伝え、承諾を得ている）。

- ・母が認知症を患ってからの症状・出来事全般
- ・母の経歴や生育歴をはじめとする母の人生全般
- ・母に対する筆者の主観的推量や感情